

空くうの魔法陣

下

斎藤栄





栄
の魔法陣

下

空の魔法陣 下

一九八二年九月二五日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 斎藤 栄

装丁者 沢田 弘

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八一―二八四二
電話 販売部 (〇三) 二三八一―二七八一

印刷所 共同印刷株式会社
検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

空の魔法陣 下 目次

第一章	謎の仙人 ^{サボテン} 掌	5
第二章	女医の正体	22
第三章	二人の犯人	48
第四章	高瀬の石仏	78
第五章	惨殺体発見	109
第六章	雨台風上陸	136
第七章	堤防大決壊	162
第八章	必死の救助	184

	第九章	石仏の哲学	203
	第十章	玄米粥の謎	229
	第十一章	去りゆく人	255
	第十二章	犯人は誰か	277
	終章	虹色の哲学	305
あとがき			331

空の魔法陣 下

ものが平等であつて差別のないことを空くうという。ものそれ自体の本質は、実体がなく、生ずることも、滅することもなく、それはことばでいい表わすことができないから、空と
いうのである。(仏教聖典より)

第一章 謎の仙人掌^{サボテン}

1

真部の搭乗したジェット機は、九月十五日の十三時十分、無事、九州国東半島の大分空港に着陸した。

海岸沿いにある空港は、海と平行に伸ばしていた。殺風景な滑走路を、海と平行に伸ばして置いた。

九州は初めてですが、飛行機で来ると、本当に近いものです。ね」

ジェット機がエンジンを停止したとき、水原刑事が感じ入ったように言った。

「そうなんだ。だから、犯罪も、これからは常に全国的な規模で計画的におこなわれるし、犯人も簡単に移動する。

今のシステムは、基本的には、昭和二十年代の交通機関を想定してできているから、そこを改善しないと、そのうちに、処置なしになってくるだろうと思うよ」

真部は、日頃の持論を口に出した。

「アメリカみたいに連邦警察制度をつくるべきでしょうか?」

「天下り式の国家警察は、また問題があるだろうけど、都

道府県警察が自分達の力で、それを統轄するような指令機関を作りあげたらいいんじゃないかな」

「できませんか、それが……」

「なかなか、そういう風にはいかないね。ひとつは、予算の面で……。財源を国からもらうと、必然的に、上から来る方式になってしまうんだ……」

と、話しながら、空港のコンコースへ出たとき、不意に真部の足がとまった。

「なんですか?」

水原が訊いた。

「いや、なに……今、向こうに行った若い女性がいるんだけど……クリーム色のワンピースの……」

と真部が言った。

「どれですか?」

水原は伸びあがる恰好で、真部の視線を追った。

「もう見えない。あの角を曲っていったから……」

「誰ですか? 追いますか?」

「あの先は搭乗ゲートだから、行っても無駄だろう。それに、ハッキリそうだと言えないから……」

「何者ですか?」

「うん。南川病院にいた松崎という看護婦のような気がする。ホラ、聞き込みの中にあつたらう? 南川理事長と関係のある……」

「ああ。あの女ですか……」

「ああ。あの女ですか……」

南川と松崎のスキャンダルは、病院内に滲透しており、極く最近に、二人の仲が破れて、妙子が退職したという事実は、真部達も擱んでいた。

「南川が殺されたときだからね。もしあれが松崎なら……」

「乗客名簿を調べて来ますよ。本名で搭乗していれば分かりますから」

言うより早く、水原はチェック・カウンターの方へ走って行つた。

間もなく戻つて来て、

「分かりました。タエコ・マツザキ。やっぱり本人ですね。これから東京へ戻るところです。TDAの記録に残っていました」

と報告した。

「本名か。とすると、南川殺人の犯人である可能性は少ないな。もし犯人なら、とにかくここは偽名を使うだろう……」

真部は、一番、問題になる点に触れた。

「そうかもしれません。しかし、慌てていて、本名を書くこともあるでしょうし、わざと堂々と本名にした方が怪しまれないと計算したことも考えられます」

「ま、現時点で、余計な詮索はやめよう。それより、実際に仏を拜んでからだ」

と言つて、真部はタクシー乗り場へ向かつた。

2

空港からは、海岸線沿いの長い道を通つて、別府市内へはいる。その右手が、石仏で名高い国東の山々である。

大陸の文化の影響を、もつとも早く受けた地方として、奈良よりも先に、この地には密教修験の文化が根づいた過去がある。しかし、今日では、椎茸栽培の山の中に、その石仏文化はひっそりと眠っているのだ。

真部達の車は、その山裾をぐるっと廻り、別府警察署の前に着いた。時刻が時刻なので、湯の花ホテルよりも、ここでとりまとめた話を聞く方が先決だと判断したからであつた。

鉄筋コンクリート造四階建の庁舎は、一部レンガタイルを貼つた瀟洒なものだつた。そこに沢山の防犯プラカードがつけてある。

——許すな暴力、明るい別府

——防犯の鍵は家にも心にも

——悪書など見まい見せまい買わせまい

——少年を守る環境浄化運動

こうしたもの以外にも、駐車場のはずれには、(事故防止)すべてあなたの心がけ」という標語が立ててある。

三階のガラス窓越しに、取調室を示す鉄柵が覗けた。

真部と水原は、ここで事件を担当する田之井警部に会つた。田之井は、県警本部の捜査一課長の口添えもあるから、

忙しい最中にもかかわらず、遠来の客に、丁寧に応接した。あるいは、この事件の犯人は、寿山医師を殺した者と同一かもしれないのだ。

田之井の説明で、真部達は、事件発生の経過、発見の状況、千代子の証言、死体検死の概略など、必要最低限のデータはつかめた。

その後で、田之井は、死体が口にくわえていたサポテンを、重要な証拠品として、真部に見せてくれた。

「……これを口の中に？」

真部は、しげしげと、ウチワサポテンを眺めた。白紙の上に置かれたそれは、切断した部分に、血らしいものがこびりついている。被害者の口に押しこんだとき、付着したのだろう。

「そうです。パラロイドで撮った写真を見て下さい」

すぐに、映像を固定するために、パラロイドでも撮影してあるのだった。

「なるほど。これを口に詰めたとところで、直接、犯行の足しにはなりませんね。窒息させられるわけではなし……」

「別の目的でしょう」

と、田之井は言った。

「現場付近に、これと同じようなウチワサポテンはありませんか。それによつては、衝動的な工作か、もつと計画的なのか、ハッキリすると思います」

「湯の花ホテルの近くにはないんです。むろん、この市内

には、栽培したり、観賞用に、庭に植えている人はあるでしょうけど」

「すると計画的ですね、ここに〈呪〉と彫つたのは、犯人の細工ですか」

「百パーセント、そうです」

「しかし、単に〈呪〉とやりたいのなら、紙に書くだけでもいいでしょう。わざわざ、サポテンにした理由……ですね、問題になるのは」

「それなんです。南川病院の医師のケースでは、ネズミの玩具が、臍の上に置いてあつたと聞きました。本当ですか？」

「本当です」

「その意味は、つかめましたか？」

「いや、未だです」

「……………」

「似ていますが……ひとつ、違ふのは、向こうの場合、ネズミには、〈呪〉という字もないし、こんな風に、まゆみ、よしおという人名もなかったことです。これは大きな違いですよ」

「犯行の成長という見方もあるでしょう」

「というと？」

「初めは、まじないの目的で、単にネズミをおいた。それが成功したので、今度はもつと工夫して、〈呪〉の字を書き加えた……。同一犯人自身が、犯行の中で成長してい

く恰好になったとは、考えられませんか？」

「あるかもしれません。しかし、まゆみ、よしお、とはな
んですか？」

「こちらでも、この固有名詞には、軽々しい判断は下せな
いと思っています。犯人の名とは考えにくいので……」

「^{かき}半のマークがついているのは、二人が恋人または夫婦の
仲だというんでしょう。それがどう犯罪に結びつくか、こ
こいらがポイントですね。これまでの聞き込みで、容疑者
は浮んで来ますか？」

「初動捜査の段階ではゼロです。ただ、阿相雅夫の名が、
ホテル側の証言で浮んでいます。その人物はマークしてい
ますが……」

「阿相氏は、こちらに姿を現わしましたか？」

「見た者はないようです」

「その人は、先日まで神奈川県下の丹沢の山に籠ったりし
て、挙動がつかめていないのです。いずれにしても、消息
をつかまないと……。事件のカギを握っているんですよ」
真部は、阿相が重要人物だという点を、この席で強調し
た。

3

別府警察署の次は、湯の花ホテルである。田之井警部は
同行できないというので、一応、ホテル側に電話をいれて
もらってから、真部は水原と一緒に、現場へ廻った。

本来なら、千代子にまず会いたかったのだが、彼女は遺
体と共に、解剖担当医の診へ行った後だった。

殺害現場は、捜査員による人海作戦で、遺留品チェック
がおこなわれ、それからは、旧に復されていた。交通渋滞
を避けるためであった。

「われわれが追っている犯人と同じ奴が、この事件を起こ
したとしたら、そのメリットはなんでしょうか？」

水原は、湯の花ホテルの城壁のような外部を見あげて言
った。

「……………」

真部は黙って、地上に残った白い人型の線を見詰めてい
た。

「南川理事長を殺すつもりなら、何もこんな九州へ来たと
きでなく、病院にいるときの方がやりやすいでしょうに」

「それは分からんね」

と、真部は言った。

「あちらの方が身辺警戒が嚴重だからですか？」

「それもある。警備員をやとって、ガードしていたからね。
それより、こうした旅先の方がスキはあるだろう」

「しかし、九州へ来るというのは大変ですよ」

「阿相ならどうだ？ 自分の家のそばでできるじゃない
か」

「そうなりますが、まだ、彼とは決っていませんよ」

「むろんさ。捜査はこれからだから、決めこんじやいけな
い」

い。とにかく、犯人は、目的を遂げているし、さっきのサポテンがある。サポテンといえは、宮崎のサポテン公園や……いずれにしても南国を連想するだろう。舞台装置として、別府はピツタリだ」

「そこまで考えているんでしょうか？」

「そう思うね。ところで、被害者がここに立っていたとして、犯人は歩いて近づいたわけじゃないだろうな。やつぱり車で来たとみるべきだろう」

真部は、手帳の上に、死体の位置関係をメモしていた。

「犯人の遺留品は、あのウチワサポテンだけです」

「サポテンの研究もさせられるのか」

真部は苦笑いした。

「結局、どう考えるべきでしょうか？ 寿山医師を殺した

者と、今回のとは同一か……」

「現在では、イエスとも、ノーとも言えない。もし、イエスといえるときがあれば、それはもう一人……南川病院の関係者が消された場合だろうね。そうなれば、連続殺人を疑っている。それまでは、決められない。まったくの別件のケースもあるだろうね」

「まさか、もう一人、早くやってくれとは言えないし、その判断が難かしいですね」

「千代子夫人はどうか。被害者の奥さんなら、何かをカンプいていなけりや、かえっておかしいと思う」

「次の目標はその辺ですか」

二人が現場を観察していると、一台の車がそばにとまった。

4

車には、毎朝の旗が立っていた。

「早いですね」

覗いたのは梶だった。

「梶さんか。そちらこそ。地獄耳……といたいけれど、こりや耳より足の方が早いな。どうして別府へ？」

真部は、熟知の仲の梶が、思いもかけず九州にいたのに驚きの色を隠さなかった。

「カンですよ。わが社では、ほくのほかに、二人も繰りこんでいるくらいで……」

梶は自慢げに言った。

「そう」

「で、見込みはどうですか？ 連続殺人と踏んでいるのですか？」

「未だ未だ……」

「隠さないで下さい。寿山医師のネズミに対して、こちらのサポテン。こんな変な遺留品はありませんよ。同じ犯人とみて、初めて筋が通ると思うんですが」

「毎朝さんのご意見は、捜査会議で尊重させてもらおうつもりです」

と、真部が、親しい仲らしい冗談を、ちらつと言った。

「光栄です。それで……ウチワサポテンを、なんと見るんですか？」

「今、着いたばかりで、まったくの白紙ですから」

真部は、記者のペースに巻きこまれぬように、やんわりと釘をさした。

「その白紙がいいんですよ。先入観がないからこそ、物事の真実を見ぬくというわけで……」

「ウチワサポテンでは、とても裏まで見透かすというわけにはいかないから」

「誤魔化すつもりですか」

「とんでもない。それより、一足先に来て、調べたのなら、何か掴んでいるでしょう」

「ま、ひとつやふたつは……。たとえばサポテンそのものについて」

と、梶は手帳をめくった。図書館で調べた事項が走り書きしてあった。

「どんな？」

「サポテンは本来、呪いに関係があるんですよ」

ズバリと言って、梶は、真部と水原の双方を見た。背の高さは、水原が三人の中で一番だが、精悍さは真部が光っている。

「ホウ。サポテンを死者の口に飾ることが、アメリカインディアンの習慣ですか？」

真部は思いつきを言った。が、梶は手を打つと、

「ご名答ですよ。どうして、アメリカインディアンと分かりました？ 凄いな」

と言った。

「だって、サポテンは、大体がインディアンにぴったりした植物じゃないかと思うし……」

「サポテンを食べると、その中に含まれているアルカロイドが、特殊の作用をするのだそうです。ホラ、アロエというのがあるでしょう。葉サポテンというのが、あれはアロインという成分がいろいろ作用するらしいんですが、サポテンはもつと強力らしくて、インディアンは、こいつを食べるわけです。そうすると、一種の幻覚症状が起きる。それを利用するんでしょう」

「呪いに？」

「呪いに、です。ぼくが調べたところでは、インディアンは、呪いとまじないの両方に使用していると書いてありました。呪術者自身が、サポテンを生で食べて、麻薬服用と同じ状態になるわけですね」

「サポテンと呪い……じゃ、この犯人はインディアン……でないにしても、それを真似したのかな」

「考えられますよ」

「しかし、なぜ、アメリカインディアン你真似をしなけりやならなかったのか、その必然性が弱いような気がする……」

と、ここまで言ったとき、真部は、阿相のことを思いつ

いた。

「犯人が誰だか分かれれば、きつと必然性が出てきますよ。必然性のないことを、犯人はやっていけないと思うんです。あんなことをすれば、犯人にとつて、不利になるでしょう。それをあえてやった。やったからには、どうしても、やらずにはいられなかつた理由があるでしょう」

梶は強調した。

「ま、いずれそれは……。今、ちよつと思ひ出したことがあるけど……阿相氏は、確か、アメリカ帰りの学者でしたね？」

「そうです。ニューヨークの黒人ハーレムを研究している学者ですから」

「黒人ハーレム……それと、アメリカインディアン……。なんとなく近い感じがしないでもないな」

「そうでしよう」と、梶は急に、目を輝かせた。「黒人なら、サポテンの呪術力を信じていて、とにかく、それを使おうとするかもしれないんです。ただ、阿相先生自身は、日本人ですよ。いくら黒人カブレしたにしても……」

「こじつけはできませんな。でも、阿相氏に会つたら、第一に、このサポテンについて訊いてみたくなりました」

「ほくも、その点は同じです。ただサポテンの語源は、石籟を意味するサボン、シャボンだとも言いますね。サポテンを切つて、石籟の代用品にもするからです。この方が、日本人的でしょう。たとえば、犯人が被害者の、腐つたは

らわたを洗つてやる、という意味を表現したとか……」

「さすがに、よく調べていますね。そのほかには？……」

「そのくらいです。それより、サポテンに彫りつけてある、あの二つの人名を、どうぞご覧になるんですか？」

と、梶は話題を先に進めた。

5

梶の言葉は、丁寧だが、内容は事件の核心に迫るものだけに、真部も、迂闊には答えられなかつた。

犯人が、〈呪〉と彫つた反対側の人名には、それなりの意味がある。

「実は、あの彫りこんだ傷について、もつと調べてみないと分からないけど、どうも、彫つたのは、あの人名の方が古いような気がする……」

と、真部は、自分の記憶の糸をたぐつた。

「うんうん、それは言えそうですね。ほくも一目で、あの人名はずつと古いものだと思ひました」

梶は頷いた。

「そう思う？」

「ええ」

「それなら、考え方として、二つあるでしょう。あれは犯人が〈呪〉の字を彫るために、適当に使つたというだけのこと、事件と無関係の場合。第二は、あの二人の男女が、犯人乃至、それに近い重要人物である場合……」

「そのことですが……」

と、梶は、声の調子をおとした。

「なんですか？」

真部は、この敏腕記者が、何かを掴んでいるに違いないと、ピンと感じるものがあつたのだ。

「ぼくは、さつき、念のために、南川病院受診被害者同盟のメンバーを、ざっと調べたんです。メンバー表のコピーは、いつも身につけているので……」

梶は、かすかに笑つたようであつた。

「ホウ。で、どうなんですか？」

「結果だけを先に言いますとね。いたんですよ。この、まゆみ、よしおという名に該当する人が……」

「いた？」

真部と水原は顔を見合わせた。自分達より早く、毎朝に調べあげられているという、焦りがかすかに湧いた。

真部と梶は、これまで、協調したり、競争したりを繰返しながら、多くの事件にかかわつて来た。いわば、いい意味でのライバルである。そのライバル競争で、今回は梶が一步、先行しているのだつた。

「そうなんです」

「なんと人物ですか？……いや、こちらでも、すぐに分かることです」

「一人は、小泉まゆみ。もう一人は谷川義夫です。住所は二人とも、横浜市港南区になっていますね。きつと、近所

なんでしよう。年齢は、小泉まゆみが三十六歳。谷川義夫は四十歳。病名は、前者が子宮ポリープの手術を受けているんですが、これはガンでも前ガンでもなく、いわば健康体なのに、子宮全摘をやられている。後者は、足の壊疽手術の失敗を主張している者ですね」

「その二人に、今のマークがしてあるのは、どういうことになりますかな」

「多分、両者とも、世帯持ちだと思つたので……。しかし、この点、ぼくはこんな風に思いますよ」

「……………」

「つまり、この人名は、犯人のつくつたミスリーディングのタネになっているような気がします。わざと、捜査を混乱に陥し入れるために、被害者同盟の中の人名が彫つてあるウチワサポテンを使つたと……」

「そうかもしれない」

と、真部は、伊豆のサポテン公園などで、やたらに、サポテンに彫りつけられた、相合傘の男女の名を想い起こした。

「ですから、この二人を洗つても、何も出ないかもしれないませんよ。まゆみというのが、小泉まゆみかどうか、よしおだつて、谷川義夫でないかもしれないし、良雄という字もあるでしょう」

「その通りには違いないけど、われわれとしては、該当者に当つてみるしかないんです。幸か不幸か、今回は、九州

で事件が起きているから、アリバイをチェックすれば、すぐに結論はでるわけで……」

「偶然だといいますよ。いやあ、あの被害者同盟の人間の中に、殺人者がいるのでは、なんともやりきれないですから」

「まったく……」

その点は、真部も同感であった。刑事稼業とはいっても、身につまされるような人物が犯人であるのは、やはり辛い。

「そのことは専門家のみなさんにまかせるとして、この現場と、ホテルの部屋の関係ですが……」

梶と真部は、水原刑事を従えるようにして、再び、ホテル内の庭園に戻った。このとき、慌てたような足取りで、飛び石伝いにこちらに来る女性がいた。

千代子だった。

6

このときの千代子の態度といったら、まったくおかしなものであった。石庭になつている中央の庭の方まで、石臼を埋めてつくつた飛び石の上を歩いてくるのだが、その足取りの覚束なさは、まるで魂のぬけた人間そっくりだった。手足の動きや身ぶりには、ぎこちない人形みたいなのところもあり、千代子の心の中の乱れをハッキリ示していた。

彼女は、最初、ここに真部や梶達がいるとは思わずに、ホテルへ戻つて来たようだ。ホテルには、全病経の者は、

事件、処理のために残つた事務局員二名のほかは、全員、ゴルフコンペの会場の方へ出かけてしまつてゐる。主催者としては、この処置は当然のことだつたかもしれない。

真部は、ここで千代子に会えたことを喜んだ。

「あら……」

真部と目が会つた千代子は、一瞬、ドギマギした風で、小径の端に立ち止まつた。

「南川さん。戻られたのですか？」

真部が訊いた。

「ええ。みなさんは……今、来られたの？」

「そうです」

「ああ……よかつた」

「よかつたとは……なんですか？」

真部は怪しんで追及した。

「ここでよろしいかしら……。私……今、駅前である人に会いましたの」

「別府の駅前で？」

「はい」

「毎朝の梶さんの前で具合悪ければ、ほかで伺いますよ」

「いいえ。特に悪いことはございませんわ。では申しますけど、私……駅前で、阿相雅夫という人に会つたんです」

「阿相……」

真部と梶の二人は、ほとんど同時に、この名を口走つた。千代子の口から、この名がこんな恰好で出ようとは、予期

していなかったのだ。

「はい。阿相さんは、主人に電話をかけて来た人ですし、まさかと思っただけですけど、やはり……」

千代子は、怯えさえみせて言った。梶は、千代子の証言を怪しんで、思わず自分が問いかけようとし、危うく思いとどまった。真部が訊いた。

「面と向き合っただけですか？」

「いえ。向こうは気がつかない様子でした。私の方が素早く、物陰に隠れましたから」

「どんな恰好をしていましたか？」

「背広を着て……でもノーネクタイでしたわ。帽子もなく、サングラスもかけてなかったので分かりました」

「見かけた場所を教えてください。いや、これは重大な証言ですよ」

「別府駅前の……あそこには、〈防犯で築く良い街 明るい別府〉という標語のあるところでしたわ」

「駅の正面ですか」

「ええ。私、タクシー乗り場へ行こうと思ひまして、大分自動車専門学校の見板がある方へ歩いていたんです。そうしたら、たまたま、目の前を横切って行く男の人を見ました。あの人は、とても急いでいました。そのせいか、私に気がつかなかったのですわ。私、急いで、通行人の陰に隠れるようにして、尾行してみました。あそこには、P地整理場の大きな自動車の絵のある立て看板がありますわ。」

そこから、私を見た人が誰であるか、もう一度確認しました」

千代子は一息に喋った。そして、咽喉がかわいたと言いたげに、ごくりと唾を呑み込んだ。

「それは、阿相さんに間違いないかったですね？」

真部は念を押した。

「はい。主人を呼び出した人ですから、私、あの人が別府に來ていることに、どんな意味があるか分かってはいますもの」

と千代子は言った。

「その後、どうしました？」

「どんどんと繁華街の方へ歩いて行ってしまったんです。よく考えてみれば、追いかけて行くべきだったかもしれないわね」

「声をかけていただき良かったですな」

と、真部は、やや非難めいた口調で言った。

「失敗でしたわ」

「しかし……阿相氏が、今頃、別府駅に現われたことで、かえって、あの人の容疑は薄れたような感じもするんです」

真部は、ちらつと梶の方を見た。梶は、右手で髪の毛を二、三度掻いたが、何もコメントはしなかった。

「どうしてですか？」

と、千代子は訊いた。